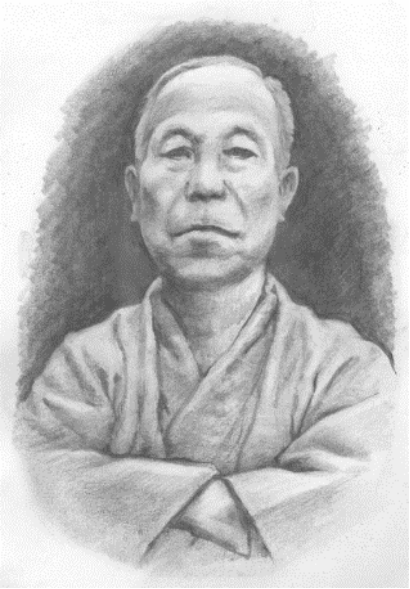
社会福祉の先覚者（せんかくしゃ）

― 留岡幸助（とめおかこうすけ） ―

北海道紋別郡遠軽町留岡（ほっかいどうもんべつぐんえんがるちょうとめおか）、ここに北海道家庭学校（以下「家庭学校」という。）がある。この家庭学校は、現在民間の施設としては全国でただ一つの男子の児童自立支援施設である。礼拝堂や宿舎、畜舎など三十二棟にのぼる施設をはじめ、農場や山林を含（ふく）む四百三十九ヘクタールのこの教育農場は、大正三年（一九一四）の開設以来、二千五百名以上の少年たちの社会復帰を助けてきた。

この家庭学校の創始者が、留岡幸助である。



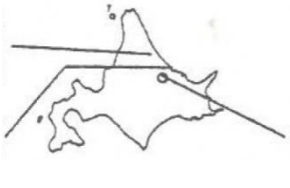
元治（げんじ）元年（一八六四）、幸助は、備中松山城下（現在の高梁（たかはし）市）で町人の子に生まれ、すぐに米屋を営む留岡家の養子となった。

少年時代のある日、幸助は士族の子とけんかをした。相手が木刀で打ってきたのに対し、自分は相手の腕にかみついて抵抗したのである。相手の士族の家は怒り、幸助の義父に取り引きの中止を伝えてきた。その結果、幸助は義父に殴（なぐ）り倒されるという罰を受けたのである。

（もともとは相手の暴力が原因なのに、なぜ自分だけが罰を受けるのか。相手の暴力は棚（たな）上げにして、自分だけ罪人扱いされたのではあまりにも不公平だ。）

こうした出来事を通して、身分差別は不合理だと感じていた幸助は、その後、神の前では士族も町人も同じ価値をも

北海道紋別郡遠軽町留岡（ほっかいどうもんべつぐんえんがるちょうとめおか）



先覚者…人々より先に物事の道理や時代の流れの変化を見抜き、事を行った人。

児童自立支援施設…児童福祉法に基づく児童施設の一つで、不良行為をするおそれのある児童や家庭環境等から生活指導を要する児童を入所させ、必要な指導を行って自立を支援することを目的とする。

士族…明治維新の際、旧武士階級に与えられた身分。法律上の特権はない。

棚上げ…問題を一時的に未処理・未解決のままにしておくこと。

っているというキリスト教の教えに触れ、高梁教会で洗礼を受けた。そして、明治十八年（一八八五）、京都の同志社英学校に進学した。当時同志社英学校では、世の中への奉仕を自分の使命として、社会的に弱い立場の人々に尽くすことを教えとしていた。

「留岡君、君はこの先どうしたいんだい。」

同志社英学校で友人となった岡本に尋ねられた幸助は、手に持っていた本の表紙を見せた。

「実は、この『監獄改良家としてのジョン・ハワード』という伝記を読んで、僕は身震いがしてね。それで僕は、監獄改良に取り組もうかと考えているんだよ。」

「なぜ監獄なんだい。世間では、罪人はどんな愛をもってしても改善できないとして、冷たく見捨てていることなのに。」

岡本は尋ねた。

幸助の脳裏には、少年の日に感じたあの苦い思い出が浮かんでいた。

「僕はそうは思わないんだ。」と言ってから、幸助は話を続けた。

「政府は、罪人を北海道に送りこみ、まるで牛馬のように扱って過酷な環境で働かせるそうだ。いくらなんでもひどすぎるよ。人間は、きっかけさえあれば、自分の間違いに気付き改心することだってできると思うよ。だから僕は、罪人の心の支えになりたいんだ。ハワードのように、一本の蝋燭になって社会の暗黒を照らしたい。」

幸助の決意は固かった。

幸助は同志社英学校を卒業後、教会での伝道生活を経て、アメリカに渡り、監獄事業について学んだ。そして、帰国後は非行少年たちの自立を支える「家庭学校」を設立しようと考えた。罪人の多くが不遇な少年時代を送り罪を犯し

洗礼…キリスト教徒になるための儀式。

同志社英学校…のちの同志社大学になる。

監獄…受刑者・刑事被告人・被疑者を監視する施設。

伝道…その宗教の教えを伝え広めて、信仰をうながすこと。

監獄事業…それまで監獄は罰を与える施設と考えられていたが、十九世紀末、監獄では受刑者は過去について罰せられ、将来に備えて訓練されるべきという考えによって、監獄を改良する動きが起こった。

たことから、罪を犯す前の少年期から支援することが重要と考えたからだ。彼はまず、東京の巣鴨に家庭学校を設立した。しかし、厳しい大自然こそが人間を育ててくれると信じ、北海道の社名淵に北海道家庭学校を設立したいと考えるようになった。ところが、理想に燃える幸助に思わぬ壁が立ちはだかった。

家庭学校の設立に向けて、地域から反対の声が上がったのだ。住民たちは、非行少年が集められる家庭学校が地域に悪い影響を及ぼすのではないかと心配していたのだ。

「少年たちは確かに過ちを犯したけれど、それは、親と離ればなれになり生きていく上で仕方なく過ちを犯してしまった者が多いのです。自分で生きていく力を身に付ければ、この先再び過ちを犯すことはないと私は信じています。家庭学校は、少年たちが自ら過ちを反省し、これから生きていく力を身に付けていくための施設です。私は、彼らの過去にとらわれず、未来に希望をもたせてやりたいと思います。どうか彼らにやり直す機会をもたせてやってください。」

幸助は、家庭学校設立への理解を求めていったのである。

こうした努力の末、ようやく設立した家庭学校で、幸助は少年たちの立ち直りに向けて、試行錯誤の日々を重ねた。当時、少年たちを収容する施設の多くは、高い塀や見張り台があり、逃げられないようにしっかりと監視することが当たり前だった。しかし、幸助はそれでは、少年たちは立ち直れないと考えていた。幸助は、家庭的な雰囲気の中で少年たち一人一人と向き合い、彼らが家族として大切にされること、自然の中で一生懸命働くことで自分が役に立っているという実感をもたせることが大切だと考えていた。彼らの一面だけを見て判断するのではなく、彼らを信じ彼らのよさや可能性を引き出し伸ばすことで、彼らに社会の中で生きていく力を身に付けさせようとした。そのため家庭学校では、鍵のない部屋で少年たちと職員が共に生活するようにした。また、学校での勉強だけでなく荒れた土地

を開墾し、野菜を育てたり牛馬の世話をしたりするなど共に汗を流して働く中で、彼らの可能性を引き出していった。

世間(せけん)では陰口をたたかれ、見向きもされなかったのに、ここでは一人の人間として大切にされ、一生懸命働けばそれが周りから認められ、大自然もそれに応(こた)えてくれる、このことが、少年たちのすさんだ心を次第に回復させていった。そして、一生懸命働く少年たちの姿は、家庭学校の設立に否定的だった人々の心を動かし、家庭学校は地域に受け入れられていったのである。

北海道家庭学校がある地には「留岡」という名がついている。それは、自分の生きる価値、生きる目的を見いだしてほしいという思いで少年たちに寄り添い、可能性を信じて自立を支え続けてきた幸助の長年の功績をたたえたものである。児童福祉法の改正により罪を犯した児童を受け入れる施設から社会的に養護が必要な児童を受け入れる施設へと変わってきているが、現在も豊かな自然の中で、幸助の思いは受け継がれ、少年たちの大切な居場所となっている。

留岡幸助の略年譜

一八六四　備中松山城下（現在の高梁市）で町人の子として生まれる。
一八八五　同志社英学校別科神学科に進む。
　　大学卒業後　丹波第一教会で伝道生活に入る。
一八九一　北海道空知集治監教誨師となる。
一八九四　渡米遊学（三十歳）。[※1]（～一八九六）
　　その後、霊南坂教会牧師、巣鴨監獄教誨師となる。
一八九九　巣鴨家庭学校創設。以後、校長を務める。
　　警察監獄学校教授となる。
一九〇〇　内務省嘱託となる。（～一九一四）
一九一四　北海道に渡り[※2]、北海道家庭学校（家庭学校北海道農場・社名淵分校）を開校。（五十歳）
一九三三　勇退し、名誉校長となる。翌年、没する。

※1 **教誨師**(きょうかいし)…刑務所・少年院などで、収容者に対して徳性の育成を目的として教育する人。

※2 **嘱託**(しょくたく)…通常の社員・職員とは異なり、その能力などを生かして特定の仕事を依頼された人。

岡山県道徳教育郷土資料集（中学校）　指導案　「社会福祉の先覚者」　留岡幸助

１　主題名　　差別や偏見をなくすために〔Ｃ　公正、公平、社会正義〕

２　ねらい

差別や偏見のない社会を実現するためにはどんな見方が大切なのか考える中で、その人の一面だけでなく全体の姿を見極めて正しく判断しようとする見方の大切さに気付き、差別や偏見のない社会の実現に向けて自分にできることから実践しようとする態度を養う。

３　主題設定の理由

（１）内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、Ｃ　公正、公平、社会正義「正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。」である。

正義と公正さを重んじるということは、道理にかなって正しいことを自ら認識し、それに基づいて適切な行為を主体的に判断し、実践しようとする意欲や態度をもつことである。そして、よりよい社会を実現するためには正義と公正さを重んじ、物事の是非を見極めて、誰に対しても公平に接し続けようとすることが必要となる。

第３学年では、差別や偏見の不合理を理解するとともに、一面だけでなく全体を見極めて正しく判断し、公平に接することを大切にしながら、差別や偏見のない社会の実現に向けて努力していこうとする態度を養っていきたい。

（２）生徒の実態について

本学級の生徒は、公正、公平な態度で接しようと努力し互いに助け合いながら様々な活動に取り組んでいる。さらに社会生活における矛盾や葛藤、差別や偏見といった社会的な問題についても関心をもち始めている。しかし、現実には固定化しがちな人間関係の中で安易に多数の意見に同調したり、一面だけを捉えて判断したり、公正でないと感じる場面に出会っても声を上げず流してしまったりする様子も見られる。

そこで、物事を正しく見極めて判断し行動することの価値について考えさせ、自分も社会の一員として差別や偏見のない社会の実現に向けて、身近なところから実践していこうとする態度を育てたい。

（３）教材について

本教材は「社会福祉の先覚者」として、少年の自立支援に献身的に取り組んだ留岡幸助の生き方を描いたものである。

少年時代に感じた身分差別の不合理をきっかけに、誰に対しても分け隔てなく接することを大切にし、社会から置き去りにされがちな弱い立場の人々に寄り添い、家庭学校の設立と実践を通して非行少年の社会復帰に取り組む幸助の姿から、一面だけを捉えて判断するのではなく全体の姿を見極めて正しく判断し、自分の正しいと信じることに従って行動することの大切さについて考えさせたい。

４　板書例

めあて
差別や偏見のない社会を実現するためにはどんな見方が大切なのか考えよう。

社会福祉の先覚者　留岡幸助

「罪人の心の支えになりたい」
・罪を犯したからといって、人間としてひどい扱いを受けるのはおかしい。
・生まれつきの悪人なんていないし、きっかけがあれば改心できる。
・この現実を放っておいてはいけない。自分の力でなんとか改善したい。

家庭学校の設立

北海道家庭学校での幸助の思い
・世間の偏見からこの子たちを守らなければいけない。
・悪い人間だと決めつけてはいけない。
・少年たちが立ち直れるよう力になりたい。
・家庭的な雰囲気の中で、家族のように大切にしたい。
・社会の中でこの子たちが力を発揮できるようにしていきたい。
・一面だけを見て判断するのではなく、この子たちのよさや可能性を伸ばそう。

差別や偏見をなくすために
決めつけた見方をしない
一面だけを見て判断しない
よさや可能性に着目する

これからの自分にどう生かすか

５　他の教育活動との関連

社会科〔公民的分野〕（基本的人権）

６　学習指導過程

○は基本発問　◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の留意点
1　差別や偏見について感じたことを出し合い、本時のめあてをつかむ。	○　日々の暮らしの中やニュースなどで、差別や偏見だと思うことにはどんなことがありますか。 ・新型コロナウイルス感染症にかかった人が差別されたり、偏見をもって見られたりしている。 ・ネットへのひどい書き込みや嫌がらせが増えている。 ・ジェンダーに関わる偏見や不平等がある。	・新聞記事等で話題になったことなども取り上げ、差別や偏見が実際には身近にあるという現実を捉え、学習課題として意識付けるようにする。
差別や偏見のない社会を実現するためにはどんな見方が大切なのか考えよう。		
2　教材「社会福祉の先覚者」を読んで話し合う。		・留岡幸助の功績について触れておく。
(1)　罪人の心の支えになりたいといった幸助の気持ち	○　「罪人の心の支えになりたい」といった幸助はどんなことを考えていたのだろう。 ・罪を犯したからといって、人間としてひどい扱いを受けるのはおかしい。 ・生まれつきの悪人なんていないし、きっかけがあれば改心できる。 ・この現実を放っておいてはいけない。自分の力でなんとか改善したい。	・「罪人だから」と決めつけている世間の見方に対して不公平感を抱いていることを押さえる。 ・子どものころに幸助が感じた身分差別の不合理が土台になっていることに触れるようにする。
(2)　家庭学校で少年たちと接していた幸助の気持ち	◎　北海道にある家庭学校で、幸助はどのような思いをもって少年たちと接していたのだろう。 ・世間の偏見からこの子たちを守らなければいけない。 ・悪い人間だと決めつけてはいけない。 ・何とか少年たちが立ち直れるよう力になりたい。 ・家庭的な雰囲気の中で、家族のように大切にしたい。 ・社会の中でこの子たちが力を発揮できるようにしていきたい。 ・一面だけを見て判断するのではなく、この子たちのよさや可能性に着目して伸ばすことが大切だ。	・幸助の気持ちをワークシートに記述することで自分の考えをもって話合いに臨めるようにする。 ・グループで話し合ったことを全体で共有する。 ・出し合った気持ちの中から、差別や偏見をなくすにはどんな見方がより大切なのか話し合うことで、一面のみを捉えて偏った見方をするのではなく、少年たちのいろいろな面を認め伸ばそうとしていることに焦点化できるようにする。
3　差別や偏見についてこれまでの自分を振り返る。	○　差別や偏見をなくすために大切だと思ったことをこれからの生活のどんな場面で生かしていきたいか、これまでの自分を振り返りながら考えてみよう。 ・友だち関係で、嫌なことがあってもそれだけに着目するのではなく、その人のよさや頑張っていることにも着目したい。 ・ネットでの書き込みや人のうわさに惑わされるのではなく、よく確認してから判断するようにしたい。	・具体的な場面を思い浮かべながら、なぜそう思うのか考えることで、差別や偏見についてのこれまでの自分の意識を振り返ることができるようにする。
4　まとめをする。	○　差別や偏見をなくすために身近なことから実践している教師の体験を聞く。	・実践への取組を語ることで、意欲付けとする。
評価の視点	・グループや全体での話合いを通して多様な考えを出し合い、その人の一面だけでなく全体の姿を見極めて正しく判断しようとする気持ちの大切さに気付くことができたか。 ・自分を振り返り、差別や偏見をなくして公正な社会の実現に向けて自分にできることから実践しようとする意欲をもつことができたか。	

７　参考資料

⑴ 人物について

（ア）留岡幸助

元治元（１８６４）年、高梁市新町に生まれる。商家留岡家に養子に入り、１２歳で行商人の仕事を手伝う。その頃、肺ジストマにかかり、キリスト教信者で医師の赤木蘇平宅で治療を受けた。その間、留岡は赤木の人柄や、「神の前では士族も町人も同じ価値をもっている」というキリスト教の教えに感化され、キリスト教の信者となった。明治１５（１８８２）年、１７歳で高梁基督（キリスト）教会の洗礼を受け、その後、教会員の援助により同志社英学校別科神学科に進学する。

同志社英学校では、「同志社は、世の中への奉仕を自分の使命とする人材を送り出すためにある。自由、愛、希望、そして自己犠牲の精神をもって、社会的に弱い立場の人々のために尽くせ。」という新島襄の教えを受ける。

それまでの監獄は罰を与えるところという一般的な考え方から、１９世紀末、欧米の監獄改良家たちは、「監獄で受刑者は過去について罰せられ、将来に備えて訓練されるべきであり、監獄の職員の仕事は、人間の内面に働きかけ、それを伸長させ成長させる点で教育の仕事だ」と考えた。幸助は、各国の監獄改良家の考えに触れ、監獄改良についてさらに深く学びたいと考えるようになった。

明治２７（１８９４）年、アメリカに渡り、２年間で１５０余りの監獄や施設を視察した。その中で、子どもたちの施設では、女性の職員の役割が大きいこと（当時の日本では、男性職員のみで指導にあたっていた）、自然が豊かなところに設置され、１日のうち教科学習と作業学習を行う生活を通して、子どもたちを育てていることを知る。また、ドイツ人ヴィッヘルンの「問題行動をした子どもたちを処遇する感化院に、塀とか鍵とかは要らない、むしろ大切なのは愛情なのだ」という考え方に影響を受け、のちに家庭学校設立の際の理念となった。

（イ）新島襄

アマースト大学を卒業。岩倉使節団に随行し、欧米の教育制度を視察。帰国後、京都に同志社英学校（後の同志社大学）を創立。キリスト教精神に基づく教育に専念した。

明治１３（１８８０）年には高梁を訪問。高梁のキリスト教の布教活動が加速する。

⑵ 北海道家庭学校について

（ア）設立の経緯

明治３２（１８９９）年、幸助は東京、巣鴨に家庭学校を設立した。このとき校名に「感化院」という言葉を使わず「家庭学校」と名付けたのは、「感化院」という響きは「監獄の子ども版」を連想させ、世間の冷たいまなざしを避け、少年たちに卑屈な思いを抱かせないためであり、また、つまずいた子どもたちに真に必要なのは、監獄ではなく家庭や学校であるという強い思いがあったからである。

巣鴨の家庭学校の設立を経て、幸助は豊かな自然環境の中で、教育を行うことの重要性を改めて実感した。土に触れ、野菜を育てたり、牛や馬の世話をしたりすることは、少年たちの心を落ち着かせ、労働への意欲をかき立て、自然に勤勉さを身に付けることにつながると考えた。さらに、農業をすることで自立した生活を営むことを目指した。目指す家庭学校の姿を実現するためには、北海道の大自然がふさわしいと考え、大正３（１９１４）年、家庭学校北海道農場・社名淵分校として北海道家庭学校が開設された。

（イ）「能く働き、能く食べ、能く眠る」

幸助が、家庭学校で大切にしてきたことの一つが「能く働き、能く食べ、能く眠る」という「三能主義」である。汗を流して一生懸命働き、しっかり食べてよく眠る、このような健康的な生活を送ることで、心身ともたくましく生きていく力を身に付けさせようとした。家庭学校では、野菜を育てたり、牛や馬の世話をしたり、農地を整備したりする仕事を少年たちで分担して行い、自分たちが一生懸命働いた成果を実感することで、やりがいを感じられるようにした。

（ウ）家庭的な雰囲気の場に

夫婦の職員が舎監となり、少年たちと共に生活することで、家庭的な雰囲気のもと少年たちが安心して過ごせるようにした。不遇な境遇のもと非行の道へ進んでしまった少年たちに愛情が注がれ、一人の人間として大切にされているということが実感できる環境にすることが大切にされた。

⑶ 高梁基督教会堂（県指定史跡）

明治２２（１８８９）年９月に建てられ、現存する岡山県内最古の教会堂で、プロテスタント教会としては、全国でも同志社大学のチャペルについで古い教会堂である。

明治１３（１８８０）年に新島襄が高梁で布教活動を行ったことを契機として、明治１５（１８８２）年、地元出身の教育者福西志計子や医師赤木蘇平ら１６人が原動力となって教会組織が設立され、その７年後に活動の拠点となる教会堂が完成した。

⑷ 参考文献

・『教育農場五十年』　　留岡清男（岩波書店）
・『川上重治写真集　家庭学校と留岡清男』川上重治（北海道新聞社）
・『福祉の国を創った男　留岡幸助の生涯』藤井常文（法政出版）
・『慈愛と福祉　岡山の先駆者たち１』公益財団法人山陽放送学術文化財団編（吉備人出版）
・『留岡幸助の研究』室田保夫（不二出版）
・『留岡幸助と備中高梁　石井十次・山室軍平・福西志計子との交友関係』倉田和四生（吉備人出版）
・『高梁市歴史的風致維持向上計画（第２期）』（高梁市 産業経済部 観光課 日本遺産・歴まち推進室）
・山陽新聞　2022 年 2 月 12 日版　記事 「高梁基督教会　今も輝く新島襄の教え」
・社会福祉法人北海道家庭学校
https://kateigakko.org/new/index.html
・えんがる歴史物語（遠軽町役場 経済部 商工観光課）
http://story.engaru.jp/